

「会員短信 8」

「焼芋」 原田 暉

「焼芋」がブームになっているとテレビが伝えている。しかし、俳句の世界では、ブームと言われているほどには焼芋の句を目にすることがない。焼芋を肴に思いつくまま二、三書いてみた。

「焼芋」は、言わずと知れた冬の季語である。改めて歳時記で本意を調べてみた。『(前略)享保二十年から江戸でも作られるようになり、焼芋が生まれた。栗にちかい味で八里半、栗よりうまいとのことで、九里四里うまい十三里といい、明治から、流しの焼芋屋が生まれた。菓子が貧弱な時代の大切な間食である』。

調べた歳時記は、平井照敏編『新歳時記』(河出書房新社)である。この歳時記は頑なに〈本意〉の項をたててある珍しい歳時記で、私はよく参照する歳時記の一つである。

「栗よりうまい」とあるが、昔は確かにそうだった。今の焼芋には、私の記憶にある栗に似た食感やホクホク感がない。甘味ばかりを強調した、どちらかと言うとねっとりしたものばかり。品種に詳しくないが、安納芋とか紅なんとかと言う焼芋は、どれもベととしていて好きにはなれない。

「焼芋ブーム」とは言うが、流しの焼芋屋は全く見かけなくなった。デパ地下やスーパーで年中、売っていて季節もなくなりつつある。焼芋をつくるのに利用していた「焚火」も見なくなった。また、今はもうこんな子どももいないかもしれない。

焼芋を犬より守る子は必死